

会話分析をどう学ぶか

企画責任者：平本 毅(京都大学)

話題提供者：高木 智世(筑波大学) 細田 由利(神奈川大学) 森田 笑(シンガポール国立大学)

林 誠(名古屋大学) 増田 将伸(京都産業大学) 城 綾実(滋賀県立大学)

指定討論者：西阪 仰(千葉大学)

1. ワークショップの趣旨と進行

本ワークショップでは、会話分析 (Conversation Analysis) の基礎的な考え方や諸概念、実際の分析の仕方をどう学んでいくかを、近年刊行された (もしくは刊行予定の) 三冊の本 (『会話分析の基礎』『会話分析入門』『会話分析の広がり』) の著者が合同で議論する。当日の進行は以下を予定している。

- 1) 企画趣旨説明 5分
- 2) 『会話分析の基礎』『会話分析入門』『会話分析の広がり』著者から、それぞれの本を使った会話分析の学び方について報告 15×3分
- 3) 指定討論者コメント 15分
- 4) コメントカード記入 (周囲とのディスカッションあり) 5分
- 5) 休憩 10分 (企画者によるコメントの整理)
- 6) パネルディスカッション 20分
- 7) 参加者 (聴衆) を含めた全体討論 50分

2. 背景

会話分析は社会学, 言語学, 言語教育などの分野でますます広く使われるようになってきているが, その技法の学習に焦点を当てると, 独学では習得が難しい一方で, 日本国内の教育機関では十分な学習機会が与えられてこなかった。学習の基礎的資源となるテキストについても, 欧米で書かれたものを原語で読むのが一般的であった。国内の研究者は小規模なコミュニティを作り, 助け合いながら会話分析を学んできた。だが近年, 初学者向けの教科書が国内で二冊 (『会話分析の基礎』(高木・細田・森田, 2016), 『会話分析入門』(串田・平本・林, 2017)) 刊行され, また基礎論文の邦訳も進み (『会話分析基本論集』(西阪, 2010)), 状況は変わりつつある。さらに, 本学会のものも含めた各種セミナーも定期的で開催されるようになった。加えて, 近年の論点を含みつつ基礎から応用へ橋渡しを行う論集 (『会話分析の広がり』(平本ほか, 近刊)) の刊行が間近であり, 基礎から応用まで体系的に学ぶための資源が揃いつつあるといえる。その背景には研究コミュニティの拡大, 欧米で学び活躍した会話分析者の帰国, 研究成果の蓄積, 学習ニーズの増大などがあるだろう。しかしこれらの資源をどう活用していくか, 国内の事情に鑑みた会話分析の学習をどう進めていくかは今後の課題である。他方で教育者側の人々も, 身近に手本のない中で, これまで互助的に学んできた事柄を人に教えることに困難さと戸惑いを覚えることがある。学習者からのニーズと教育者の経験の双方を踏まえ, 整理を行っていく必要があると思われる。

3. ワークショップのねらい

本ワークショップでは以上の点を鑑みて, まずは『会話分析の基礎』『会話分析入門』『会話分析の広がり』の著者を話題提供者とし, 会話分析学習ないし教育上の困難および, 各々の本を使ったその解消に向けての試みを報告する。これは上記の進行のうち2)の箇所である。この報告には①会話分析を学ぶ上で (教える上でもよい) 困難に感じている (た) こと②それを本でどのように解消しようとしたか③本内容及び特徴のごく簡単な紹介④会話分析を学ぶ (教える) 上でのチップス, 要点などの要素が含まれる。この話題提供の後に, 指定討論者 (西阪) が, 海外での自分の経験もふまえてコメントを行う (3)。なおここから休憩 (5) に入るまでの間に, 登壇者以外の参加者の方々に話題提供および指定討論を聞いてのコメントないし質問をコメントカードに記入していただく (4)。こうしてフロア全体を議論に巻き込む手

を講じた上で、パネルディスカッション (6) と全体討論 (7) を行う。

以上を通じて、教育者の経験と学習者のニーズの双方を引き出し、そのマッチングを図る。ワークショップの議論を通じて次の諸効果を得ることが期待される。ア) 国内事情に鑑みた学習ニーズの掘り起こし、イ) ア) で掘り起こされたニーズに鑑みた効果的な教育 (学習) 方法の整理、ウ) イ) で導き出された新たな教材の構想、エ) 会話分析教育 (学習) 上のチップスや工夫の共有、オ) 『会話分析の基礎』『会話分析入門』『会話分析の広がり』の活用方法の発見。

4. 話題提供

『会話分析の基礎』(4.1) 『会話分析入門』(4.2) 『会話分析の広がり』(4.3) の著者から、本のねらいと工夫を紹介する。なお『会話分析の基礎』『会話分析入門』は教科書、『会話分析の広がり』は応用的な内容を含んだ概説書である。

4.1 『会話分析の基礎』のねらい 細田由利・森田笑・高木智世

「会話分析をどう学ぶか」と言っても筆者らもまだまだ勉強が足りないことを痛感し、未だ学び続けているところである。『会話分析の基礎』では筆者3人がそれぞれ言語、あるいは言語教育の研究をする中で会話分析に出会い、訓練を受け、挫折感を味わいながら会話分析を学んだ経験から、重要だと思うこと、最初に知っておきたかったこと、これから会話分析を始めようという方達が同じ轍を踏まないように気をつけてほしいこと、を伝えようとしたつもりだ。本著の特徴とそのねらいを以下にまとめた。

4.1.1. 学生が必要としていること、よくある質問を考慮

とりわけ日本の大学で会話分析の授業を担当している高木・細田は、授業を担当し始めた頃は自身が留学先で受講した会話分析の授業のテキストやノート等をもとに授業資料を作成していたが、分かりやすい日本語による説明と日本語日常会話のデータを提示する重要性を痛感していた。何度も授業ノートを書き換え、自身で収集した日本語データの中からわかりやすい事例を選び出すという作業を延々と続ける中で、日本語で書かれた会話分析のテキストの不在は自ら解決するより他にないという結論に至った。これが、本書が生まれたいきさつである。日本語のテキストがない中で、受講生に会話分析の視点や姿勢を伝えることがいかに難しいかも痛感してきた。たとえば、なぜそれほど細かくデータを書き起こす必要があるのか、どのくらいの事例数が必要なのか、データを収集する時に参加者の男女比や年齢差、親疎関係は考慮しなくてよいのか、会話分析ではどういう「現象」を扱うのか、何を目的としているのか、なぜ仮説をたてないのか、など、しばしば学生に質問される。会話分析の出発点と目指すところがよくわからないまま会話分析の方法で会話を分析しようとすれば、このような疑問が生じるのももつともである。まずは、会話分析がどういう学問で何を明らかにしようとする方法なのかを理解することは、自分の研究の問いに対する答えが会話分析によって導きだせるのか、会話分析の方法論がその問いを問うのに適しているのかを見極める上で非常に大切だ。このことを踏まえ、第1・2章で、会話分析がそもそも社会学から出発しているということ、相互行為の秩序こそ社会制度の基礎となるものであると提唱すること、なにげない会話の中に見いだされる秩序を解明することにより、人間が相互行為を通してどのように自ら社会を秩序立てているかを研究する学問であることを説明した。抽象的な言い回しも含まれ、発話は行為を生み出す資源の一つであり、行為は根源的・本質的に社会的なものであるという見方に馴染みがない(特に)言語学を学ぶ/学んだ読者には、わかりにくい部分かもしれないが、あとに続く部分で実際の事例の記述や分析を読みながら/読んだあとで折に触れて読み返していただければ理解が深まるかと思う。(そうしたことを読者に期待して、一読して理解していただける解説が書けなかったのは一重に筆者らの力不足ゆえである。)

4.1.2. 言語学・言語教育研究と会話分析

言語学あるいは言語教育研究を専門とする読者を主なターゲットとしているのは、筆者ら3人のバックグラウンドがそうであるのと、指導する学生たちもこれらの分野であることからその需要に合わせたということが大きい。また、日本における会話分析研究者や会話分析を学び初めた方達においても、そもそも言語(学)に関心のあった方が会話分析に興味を持つようになったというケースも多いため、そのような方々に役立ててもらうことも意識した。

会話分析という方法は、自然発生的な相互行為場面の録音や録画を用いて研究することにより、人間が言語を用いる現場のリアリティを明るみに出し、「言語」のありのままの姿を浮き彫りにした。実際に録画・録音された自然会話は、言い淀みや、想像したこともないような語順や、「外国語としての日本語」の教科書には触れられていない些細なトークン、発話の独特の産出の仕方など、これまで文法学者や言語教育研究者に無視されてきた興味深い現象にあふれている。文法書ではどうも説明しきれない様々な言語資源の研究に会話分析の方法は有効である。会話分析の緻密なデータの見方は、言語学の中でも特に「機能言語学」や「語用論」などに大きな影響を与えており、自然会話のデータの豊かさがこれらの領域の研究者たちを会話分析に引きつける。しかし自然会話のデータを使い、会話分析の分析概念を「あてはめている」

だけで、主張そのものはデータによって裏付けされていないという研究もまたよく見られる。それを否定するわけではない。しかし、それだけでは「会話分析」をしていることにはならないし、データを分析するときの会話分析の基本的な構えを身につけなければ、会話分析の分析概念を学ぶ意味もない。このことは筆者たち自身が会話分析を学ぶ過程で直面した問題であり、そして学生を指導しながら気がついたことだ。会話分析の出発点、目指していること、方法論の特徴を理解することは、バックグラウンドが何であれ、会話分析に取り組む際には、非常に重要なことだと思う。会話分析の方法を使うことによる利点は何なのか、本著ではそれを始めに踏まえることの重要性を強調した。

特に2章で説明しているが、会話分析の手法を用いた研究では、データにおいて観察可能なことだけが分析の対象となる。つまり、分析は、すべて、データに現れる相互行為の展開だけがその根拠となる。会話の参加者自身が相手の発話をどう理解し、どう受け止め、それに対してどう対処／反応するかを参加者のふるまいの仔細の中に丹念に追う分析は、分析者の直感に頼る分析ではなく、他の誰もが同じデータを見れば確認できる一貫した分析となるはずである。日本人の直観によって書かれた日本語研究の論文では、日本語母語話者ならば「そう言われれば、そう言えるような気がする」と感じたり、「なんとなくわかる」と共感できる主張もあるだろう。しかし日本語を母語としない読者は、自分たちに日本語の直観がなければ、そういうものだと思えるしかない。会話分析の手法により「会話の当事者たち」が何に志向しているのかを観察可能なことに即して記述することにより、日本語を母語としない読者に対しても、参加者のふるまいが合理的（理にかなったもの）であることを示すことができるし、また、たとえ日本語非母語話者が日本語の会話分析に取り組んだとしても、説得的な分析に到達することは可能である。近年留学生を指導することが増えている筆者たちにとって、このことは強調したい点である。

また、会話分析というものは個々の事例を詳細かつ厳密に分析し記述するため、単なる事例研究のように思われがちである。しかしながら主に第2章で論じているように、実は、会話分析の手法には、研究の信頼性、妥当性、客観性を引き上げる仕組みが組み込まれているということを知ることが、会話分析を用いて自分の研究を進める上で精神的な拠り所になるのではないだろうか。会話分析の視点や姿勢を正確に理解した上で会話分析を実践しているのであれば、自らの分析に対して、なぜ統計を使わないのか、なぜ最初に話者の属性を統制しないのか、どこまで一般化できるのか、といったような隣接領域の研究者からの批判や疑問に対しても説得的・建設的に反論できるだろう。

4.1.3. 談話分析とのちがいでについて

本著でも述べているが、とりわけ、言語学を学んだ者がそのあとに会話分析を学ぶ場合、談話分析との違いがわからずに悩む場合が多い。言語学徒の中でも実際の言語使用に関心がある者は、語用論や社会言語学という言語学の下位領域の学びを進める中で（言語学的）談話分析に出会うケースが多いだろう。筆者（高木）自身について言えば、「談話」という単位で実際の言語使用の中の規則性やパターンを見出すことの面白さに気づいて当時の談話分析の定番テキスト（ほとんどが英語で書かれたもの）を読みふけたが、一方で、分析の妥当性を判断する基準が不明であることに、常にどこかで疑問を感じていた。結局は（分析者ではなく）発話者自身が状況をどう捉え、何をめざしているのかをどれだけ正確に捉えているかが重要ではないかという考えに至ったとき、最終的に会話分析に行き着くことになることは（今振り返れば）必然だったようにも思う。同様の経緯で会話分析に出会った読者は少なくないであろうし、いずれにしても、様々な文脈で会話分析と併置されることの多い「談話分析」との違いを整理しておくことは有用だと考え、この点の議論にかなりの紙幅を割いた。経験上、単に違いをリストアップして「説明」するだけでは既存の解説本のように「わかるようでわからない」に止まる恐れがあると考え、Schiffrin(1994)から「会話分析の分析サンプル」として提示されているがやはり談話分析的な分析に陥っている点を取り上げ、分析の仕方がどのように会話分析と異なるのかを具体的に示すことを試みた。会話分析がどういう学問かすらも知らない頃に読んだ Schiffrin(1994)を今読み直して「会話分析ならこのように記述し、このように分析すべき」という批評をすることは、自身がどこで迷い戸惑っていたかを振り返る作業でもあった。この作業を読者と共有することが、これから会話分析を学ぼうとしている読者が無用に迷い戸惑うことから解放されることに少しでも役立つことを願っている。

4.1.4. 言語習得研究と会話分析

近年、言語教育に携わる研究者の間で会話分析が注目され始めた結果、第二言語教室におけるやりとりの分析に会話分析の手法を用いたと唱えている研究をよく見かけるようになった。しかしながら、残念なことに会話分析の用語を用いているものの、前述のように「談話分析」との違いがあいまいな研究も多いのが現実である。本著では、言語教室相互行為の分析に会話分析を用いることの可能性を検討し、それを行う際の留意点についても論じた。分析する際に、たとえそれが「第二言語教室」という限定的な場面であったとしても、他の制度的場面を分析する際と同じように、それが教室場面であるという外的背景を用いて参加者の行為に関して憶測や推測をしないことが最も大切なことである。つまり分析者は、「教師」「学習者」といった外的背景によるアイデンティティにとらわれずに参加者自身がそれぞれの瞬間にどのような規範に志向してやりとりを行っているのかに注目すべきである。また、会話分析は学習という活動として捉えられる場面における学習者の長期間および短期間にわたる熟達の過程を、参加者間で協働的に構築される相互行為の詳細な分析を通して記述し観察可能にすることによって言語習得研究に大きな貢献をできることを強調した。

4.1.5. 「会話分析をする」ということ

本著では会話分析を基礎から学びたい方々を対象に執筆したため、会話分析研究の進め方と基本的な分析概念について詳しく解説し、本著に書かれていることを手掛かりに、独学でも教室でも、「会話分析を始める」ことができるような組み立てにした。第2章で述べたように、まずは自分でデータを集めることから始めるのが望ましい。(データ収集の際の注意点について説明したところでは、なぜインタビューデータやロールプレイのデータを避けるべきかについて述べた。) 何故ならば、自分で収集したデータならば、丁寧にトランスクリプトして丁寧に観察しようというインセンティブが持続するし、会話分析ではともかくその姿勢が最も重要だからである。ただ、自分のデータを実際に分析する前に、比較的わかりやすいデータを用いて分析の練習を行うのは有益だろう。そこで、本著では、各章の最後に筆者3名の所有するデータから適切なものを選んで練習問題(課題)を付した。会話分析ではトランスクリプトのみに頼らず、元の(音声・録画)データを観察しながら分析することも重要であることから、音声や録画のデータをウェブページからアクセスできるようにし、解答例も入手できるようにした。授業での利用や独学に役立てて欲しい。

ある程度、基本的分析概念を理解し、練習問題にも取り組んだら、自分のデータを繰り返し隅々まで観察してほしい。この段階以降、複数の会話分析研究とともにデータセッションを行うことのメリットは極めて大きい。データセッションでは、録音・録画データを何度も確認しながら発話(ターン)の一つ一つについて、「今ここ」でこの参加者はこのように発話し、ふるまうことによって、どのような行為を達成しているのか、ということをも可能な限り正確に記述することに協同的に取り組む。初学者であれば、会話分析経験者がどのようなことに注目し、どのように記述するのかを目の当たりにすることができるし、どのような記述がより説得的かを判断する力も次第に養われる。データセッションの進め方に慣れてきたら、ぜひ、自分のデータをデータセッションで検討してもらおう機会を得て欲しい。独りでデータを見るよりもはるかに多くの、興味深い様々なことが見えるということに驚くことだろう。初学者でなくても、データセッションに参加してそのような驚きを覚えることは多い。すべての会話分析研究者にとって、データセッションは分析力を向上させる場として極めて重要なのである。また、会話分析研究者はバックグラウンドが言語学、社会学、人類学など多様であるため、データセッションの参加者のそれぞれが注目する箇所や興味をひかれる箇所が異なることも多い。しかし、会話分析という手法を用いている限り、分析はすべてデータの具体的な箇所につながり定められているはずであり、バックグラウンドに関わらず共に分析を積み上げ、精緻化していくことも可能だ。様々な角度からデータを検討して、データの相互行為の世界の隅々に深く分け入っていく醍醐味も味合うことができる。

以上、データセッションの重要性を強調したが、本著を読んで分析概念を理解し、練習問題もやったら、本を置いて、自分のデータを見てほしい。独りでじっくりと。そして、研究仲間と徹底的に。本著を通して伝えなかったのは、結局、このことかもしれない。

4.2 『会話分析入門』のねらい 平本 毅 林 誠

4.2.1. 問題意識

会話分析学習者は通常、すでに言語学や言語教育、人類学や社会学等々の、何らかの人文・社会科学の専門領域の標準的な考え方と手続きを一定身につけた状態で学び始める。学部教育のプログラムに会話分析が組み込まれることはまずなく、大学院レベルでも会話分析を専門に教える研究室は数えるほどしかない以上、現状ではこれは避けられない事態であるように思われる。

一般に、そうした諸領域はデータを説明(explain)するための専門的な理論、モデル、方法論などを備えている。これらはそれ自体貴重な学問的蓄積であり、その習得はたしかに、会話分析の学習を助けることもある。だが他方で、そうした知識や技能を身につけているがゆえに、逆に会話分析の学習が難しくなることもある。というのも、研究法の学習は少なくとも基本的な考え方および分析手続きの習熟からなるけれども、会話分析のそれは非常に独特なものであり、かつ他の分野のものと両立しにくい場合があるからである。つまり、会話分析学習者の多くは、自分たちがそれまで学んできたものとのギャップに直面することになる。

『会話分析入門』の構想段階にあった大きな問題意識は、これであった。筆者陣の周りには会話分析に興味をもって集まる人もいるが、その多くは自分たちが身につけてきた知識や技能とのギャップに戸惑いを覚え、やがて離れていく。もちろん好みや相性、得手不得手の問題は如何ともしたが、会話分析のエッセンスにたどり着く前に見切りをつけるケースが多いことは解決すべき課題であった。

上記のギャップは具体的には、データの見方の問題—会話分析的なデータの見方ができるかどうか—にあらわれる。会話分析初学者はしばしば、自分たちが学んできた理論、モデル、概念等々にあてはめてデータで生じていることを説明しようとする。とりわけ本書がメインターゲットとしている社会学徒の場合、データの裏あるいは奥底に社会構造—集団間の権力差や抑圧関係、歴史的な非対称性など—の痕跡を見出すように訓練されてきた人も多く、どうしてもデータの分析

に、本当に当該場面の参与者たちが気にかけているかどうか分からない事柄を持ち込んでしまう。加えて会話分析で使われる概念も、他の分野の前提に引きつけて理解されることが多い。たとえば発話の連鎖組織 (sequence organization) が、データの中に事実として現れた発話同士の連なりパターンを意味するのではなく、発話同士がどう連なるべきかという規範的次元に属するものであることは、談話のまとまりであるとかその他の発話の組み合わせを学んできた者には簡単に受け入れにくいだろう。『会話分析入門』でも使用した下の断片においては、01 行目で質問が行われ、これに04 行目で回答が与えられている。しかしこの間に02 行目の、01 行目の発話の一面を切り取った感想が挟まれている。

【断片1】

- 01 ミサト： あれが、あの(0.2)お鍋にゴキブリが
入ってた人がハシモトくん?=
02 ユウカ： =え(h) え(h)汚な(h)
03 ミサト： .hh [hh
04 トモカ： [え, ちゃ(h) う hu
((「違う」という意味の近畿地方の方言))

この02 行目は01 行目への反応ではあるものの、質問という行為に対して返されるべきものではない。それゆえ聞き手はこの時点でまだ01 行目で開始された連鎖が完了していないことをみてとることができ、実際にトモカは04 行目で、02 行目でなされなかった質問への回答を行なっている。

01 行目と04 行目が、少なくともトランスクリプト上は隣接していないのに隣接ペアという発話連鎖の一種であり、むしろ01 行目と02 行目が、トランスクリプト上で隣接していて、かつ02 行目は01 行目への反応であるのに隣接ペアではないというのは、しばしば理解されない。隣接ペアを始め会話分析の諸概念が捉えるのは、相互行為の参与者自身が互いの振る舞いを説明可能 (accountable) なものにしていく - たえば隣接ペアがあることによって相互行為の参与者自身が、02 行目の時点で回答が返されていないことを理解することができ、その理解が次の行為の資源になる - 側面だが、多くの学習者は参与者にとっての理解可能性を詳細に記述するという方針に親和的ではなく、何らかの概念や手続きをあてはめることで現象を研究者の立場から説明しようとする。後者の見方の問題点は、なぜ、データの中のやりとりが秩序立ったものとして成立するのか、このことには解答を与えない点にある。ある振る舞いが行なっていることをどう理解するかは、研究者の記述の問題である以前に当該場面の参与者にとっての問題であり、このことを正面から受けとめない限りは、上の断片でミサトが01 行目の質問で始めたこと (連鎖を開始すること) をひとまず終えるのに02 行目の反応では足りず、04 行目の回答が産出されるような、データの中でのやりとりが秩序立ったものとして成立するメカニズムに迫ることができないのである。

自分がそれまで身につけた知識や技能を駆使してデータで生じていることを説明するのをいったんやめ、参与者自身が互いの振る舞いを説明可能なものにしていく過程を丹念に記述することを通じて、参与者にとっての行為の理解可能性の問題に正面から取り組む。このことの分析上の利点を理解し、同時にこの方針に沿って具体的なデータを見ることができるようになることが、会話分析の習熟には必要だが、多くの学習者はゼロから学ぶのではなくすでに別の素地を身につけた状態で入門するので、学習に困難が伴うことになる。

4.2.2 『会話分析入門』の特徴

以上のことを意識して、『会話分析入門』では章構成に工夫を凝らした。第一に、旧来の教科書では取り上げられることの少なかった「行為の構成と理解」を、一章 (第2章) を割いて説明することにした。第二に、この「行為の構成と理解」の後に「分析の手順と方法論」 (第3章) を置き、会話分析の主要な目的が行為の構成と理解にあることを明確にした上で、具体的に行為をどう記述するかを説明した。第三に、第4章以降は連鎖組織や修復組織といった「相互行為の一般的秩序現象」の詳述に入るが、なかでも最初に連鎖組織を取り上げ、連鎖構造の同定が行為の記述を大きく助けることを論じた。第1章のイントロダクションから第4章まで、前半の4章を一連のまとまりをもったものとして配置することを通じて、会話分析の考え方から分析の実際までを、丁寧に説明することを心がけた。

あらためて『会話分析入門』の章構成を紹介すると以下の通りである。

- 第1章 会話分析とは何か
- 第2章 行為の構成と理解
- 第3章 分析の手順と方法論

- 第4章 連鎖組織
- 第5章 順番交替組織
- 第6章 発話順番の構築
- 第7章 物語を語る
- 第8章 修復
- 第9章 表現の選択
- 第10章 成員カテゴリーの使用
- 第11章 全域的構造組織
- 第12章 相互行為・制度・社会生活—会話分析の研究対象の広がり

上述のように第4章以降は「相互行為の一般的秩序現象」にあたる各種組織とそれに関わる事柄の概論が提供されている。第5章から第7章までは、発話順番の構築と交替に関連する諸点を取り上げられる。第8章からはさらに多様な相互行為の諸組織や概念が説明されるが、この流れの中で施されている工夫の一つは、そうした諸概念が行為の記述というメインテーマとどうかかわるかを示していく、というものである。たとえば物語を語ることを通じて不平や愚痴という行為が遂行される（第7章）、他者開始修復が相手に対する不同意の前触れとして使われる（第8章）、などである。

本書のもう一つの特徴は、日本国内の学習者のニーズをふまえた工夫を行なっていることである。まず、使用する断片を基本的にすべて日本語会話にした。日本国内で出版されたこれまでの入門・概説論文の類では、英語断片の邦訳が使われる傾向にあった。しかし、ただ考え方や知識を伝えるだけでなく、読者が自分で分析を行うことを想定するなら、データが日本語会話であるに越したことはない。また、データが日本語会話であることと関連して、関連先行研究についても邦文献を積極的に紹介している。これらにより、本場で刊行されたすぐれた入門書・教科書の内容をそのまま伝えるのではなく、日本の学習者向けにローカライズされた内容にすることができた。加えて、実際の音声から確認できるように、可能な限り公開コーパスから断片をとることにした。

さらに、表現の選択（第9章）や成員カテゴリーの使用（第10章）、全域的構造組織（第11章）といった、これまでの教科書であまり言及されてこなかった事項を独立した章として取り扱っていることも本書の特徴の一つである。これらは後半部分の一連の流れをなすが、最後の第12章における制度的状況の分析とあわせて、社会学徒にアピールする内容となっている。社会学徒でなくとも、会話分析に興味をもつ人には何らかの制度的（あるいはそれに準ずる）場面のデータを収録した方がいいが、その分析の仕方を模索している人が含まれる。第9章からの後半の各章は、このニーズに応える役割も担っている。

4.2.3. おわりに

『会話分析入門』は「行為の構成と理解」をテーマに掲げた上で、様々な概念や既存研究の知見を紹介しつつその具体的な分析の仕方を提示していく構成になっている。その流れに沿って学習を進めれば、すでに他分野の知識を身につけた人をはじめ多様な学習者のニーズを満たすことのできる内容であることが期待される。

4.3 『会話分析の広がり』のねらい 増田 将伸 城 綾実

4.3.1 刊行に至る背景

『会話分析の広がり』は、社会言語科学会のおかげで刊行できた論集といっても過言ではない。本書を編むきっかけとなったのは、2012年に開催された第30回研究大会ワークショップ「会話分析のスペクトラム—その広がり可能性—」およびその後の報告論文（平本ら、2014）である。本書の特徴や日本で会話分析を学ぶ上での問題意識を述べる前提として、このワークショップを実施した問題意識や経緯を述べておきたい。

上記ワークショップへの応募当時、企画責任者および話題提供者（『会話分析の広がり』編者陣）は、関西で会話分析を学ぶ駆け出しの研究者であった。編者陣はおおよそ同世代と呼べる仲間であり、いくつかの共通点があった。まず、所属先で会話分析について体系的に学ぶ環境が整っていなかったため、学外にデータセッションや議論の場を求める学徒であったこと。また、いわゆる会話分析の本場である米国や英国の大学院で訓練を受けたのではなく、主に日本で会話分析の訓練を受けていたこと。さらに、若手とはいえ、自分たちの下の世代とも呼べるような若手も育ち始めており、教えてもらうだけではもはやいられないという意識があったこと。このような共通点を有したメンバーに向けて、平本毅が、自分たちも会話分析の学術的・教育的発展に寄与するような仕事をするべきではないかと声をかけたことが、ワークショップの企画の端緒である。

ワークショップは、指定討論者を引き受けてくださった西阪仰氏のご協力もあり、盛会のうちに終わった。このワーク

ワークショップは、社会言語学会の会員らとともに、会話分析という研究プログラムが領域横断的な分析方法として広がっている事実と、会話分析自体の「わかりやすさ」と「困難さ」とを確認する機会となった（詳細は平本ら（2014）を参照）。「発話の順番交替組織」、「行為連鎖」、「修復」などをはじめとする、人々が繰り返し用いる手続きの実態を、録音・録画データと精緻に書き起こされたトランスクリプトを頼りに明らかにしていくという分析手順としてのわかりやすさとは裏腹に、実際の相互行為を適切に記述することの難しさ、そして4.2節で述べられた「人文・社会科学の専門領域の標準的な考え方と手続き」との乖離の数々を、いくらか示すことができたはずである。加えて、企画責任者および話題提供者にとっても、自らの研究における立ち位置と諸課題を確認する機会となった。

その後、平本ら（2014）の刊行を契機として、ワークショップの成果に基づく書籍の出版企画が立ち上がった。当時、すでに『会話分析の基礎』と『会話分析入門』の執筆が進んでいることを知っていたメンバーらは、「教科書と研究論文集の間に位置することのできるような、初学者にも手に取りやすいような論集」を編むつもりで執筆の構想を進めた。編者陣の未熟さもあり刊行までにはかなり時間がかかってしまったが、本ワークショップ「会話分析をどう学ぶか」の開催時には、刊行されている予定である。

4.3.2 『会話分析の広がり』の特徴

最初から会話分析の教科書として構想されていた『会話分析の基礎』と『会話分析入門』とは異なり、『会話分析の広がり』は、会話分析が「広がる」ことで複数の学問領域とどのような関係を築いているのか、そして、この先どのような展開をしていくのかという現状と展望について紹介することに重心を置いている。そのため、教科書と比べて基本的概念の紹介、実際に分析する際の注意点などは必ずしも網羅的に述べられていない。したがって、教科書の内容をある程度理解した上で本書を手にとりいただくと、本書への理解はもちろんのこと、教科書の内容についても理解を深めることができるはずである。本書は、会話分析で近年扱われるようになったいくつかの論点や複数の学問領域との関係性について、著者自身の研究成果を交えつつ実際のデータからの例示を頼りに理解を深めることのできる一冊になっており、以下の章で構成されている。

- 第1章 会話分析の広がり（平本 毅）
- 第2章 連鎖組織をめぐる理論的動向（増田 将伸）
- 第3章 会話分析から言語研究への広がり
 - 相互行為言語学の展開（横森 大輔）
- 第4章 相互行為における身体・物質・環境（城 綾実）
- 第5章 会話分析とフィールドワーク
 - やりとりのしくみの解明と社会的世界の解明（戸江 哲理）
- 第6章 発話デザイン選択と行為の構成
 - 精神科診療における処置決定連鎖の開始（串田 秀也）
- 第7章 認識的テリトリー
 - 知識・経験の区分と会話の組織（早野 薫）
- 第8章 会話分析と多言語比較（林 誠）
- 第9章 会話分析はどこへ向かうのか（西阪 仰）

第1章では、会話分析の広がりを全般的に紹介し、各章で行なわれる詳説への導入がなされている。第2章から第8章までは、各章がひとつずつ専門的なトピックを扱う、第9章では、今後会話分析がどの方向に向かっていくのか、その行き先を見通すための手がかりを得ようとする野心的な内容が展開されている。

本書の構想時には、4.3.1節で触れたように、教科書から研究論文集や個別の研究論文などとの間をつなぐ性質の、概説的で平易な論集を編むつもりでいた。実際には、当初の想定よりはいくぶん専門性の高い論集になったかもしれない。というのも、各章で論じられる現状の課題や著者の研究は、会話分析の最先端とも呼べるものばかりであり、会話分析を専門としている研究者にとっても新しい出会いをもたらす内容となっているからである。論文集の性質としては、近年注目の論点を1冊で概観できるという意味で、*The Handbook of Conversation Analysis* (Sidnell & Stivers, 2013) に近いと言えるかもしれない。同書は825ページに及ぶ大著で多様な論点を含んでいるので、『会話分析の広がり』が比肩できるわけではないが、似たようなアプローチで日本語で読める本だというのは、本書を学習に活用する際の利点であろう。

本書は、概念を学ぶのに活用することもできるが、ゼミや読書会で批判的に読んで、理解がより深められるであろう。

また、論点の概説と分析例があわせて提示されているので、若手研究者などが自分のテーマを論文へと発展させる刺激にもなれば幸いである。加えて、本書では各章の相互参照が積極的になされているために、各章で独立した概論および具体的な分析を確認できるだけでなく、複数の章を読むことで理解を深めることもできる。たとえば、話し手が受け手に対して応答を駆動させる (mobilizing response) しくみ (Stivers & Rossano, 2010) や、評価をめぐる連鎖的組織や行為の構成についての議論など、会話分析の研究対象をひとつ取り上げて、それが各章でどのように紹介され、どのような観点から分析されているかを拾い読みするという学び方も可能である。

4.3.3 会話分析の学習において研究コミュニティが果たす役割

4.3.1 節で述べたが、『会話分析の広がり』は、基本的に日本国内のみで会話分析を学んだ編者陣による成果物である。『会話分析の広がり』編者陣が国内で会話分析の訓練を積むうえでは、串田秀也氏 (大阪教育大学) が開講して下さった会話分析の授業、串田氏主催で月例開催されている会話分析研究会、本学会等が主催するセミナー等から計り知れない恩恵を得た。これらの機会は、熟練者から初学者への専門的技術の伝承の場であると同時に、「複数人で同じデータを観察し、分析を共有し、議論する」営み (データセッション) を通じて学徒が切磋琢磨する場でもある。

データセッションは、会話分析において不可欠としばしば言われる。分析技法を訓練する機会として重要なのはもちろんだが、会話分析の特質に根ざした本質的な営みであることに注目したい。会話分析では、分析事例のコレクションからすると例外的に思える少数例も切り捨てず、分析対象の特徴が変則的な形で現れた例でありうるという視点で分析の射程に含め (この姿勢の代表例として Schegloff (1968) がよく知られている)、それによって分析対象に対する記述をより適切なものにしていく。このような分析姿勢は、少数例も含めた多様なデータの細部にまで愚直に向き合うことを要するので、文献で目にする完成形の分析のみから身につけるには限界があり、実際に雑然としたデータを、自分の手を動かして分析し、その妥当性を他者と議論する経験を積むことが重要となる。

したがって、研究コミュニティで集まってデータセッションで活発に議論することは、各自が身につける分析技法の質を高め、その技法をコミュニティに共有知として蓄積していくことにつながる。このようにコミュニティが活性化することは、会話分析の発展にも寄与するであろう。話題提供者の周りでは、研究会で分析したデータについて参加者間で共同研究が始まったり、研究会参加者が読書会や草稿検討会を新たに立ち上げたりしている事例も見られる。会話分析の教育体制はまだ普及の途上にあり、単独の機関のみで会話分析について体系的に学ぶことが難しいという現在の環境では、このようなコミュニティの活性化が持つ意義は大きい。このような会話分析の研究コミュニティをどう発展させられるのかについても議論したい。

謝辞 本稿の構想および執筆にあたって戸江哲理氏と横森大輔氏から有益なコメントを頂いた。ここに感謝する。

参考文献

- 平本毅・城綾実・戸江哲理・増田将伸・横森大輔・西阪仰 (2014). 第 30 回研究大会ワークショップ：会話分析のスペクトラム—その広がりと可能性— 社会言語科学, **17**(1), 134-141.
- 西阪仰訳 (2010). 『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社.
- Schiffrin, D. (1994). *Approaches to Discourse: Blackwell textbooks in linguistics*. Blackwell Publishers Ltd, Oxford.
- Sidnell, J. & Stivers, T. (Eds.) (2013). *The Handbook of Conversation Analysis*. Wiley-Blackwell.
- Stivers, T. & Rossano, F. (2010). Mobilizing Response. *Research on Language and social interaction* 43(1), 3-31.